

『仏鬼軍』について

中 寫 容 子

はじめに

『仏鬼軍』は、一休作と伝えられる室町物語で、十念寺所蔵の『仏鬼軍絵巻』を祖本とする諸本が広く知られている。^①

本稿では、管見の諸本の流れを整理した上で、作品の素材として仏教図像が用いられている点に着目し、その取り込まれ方を考察してみたいと思う。

一・一 書誌

まず、管見の諸本について書誌を記しておく。便宜上、版本の書誌を先に記す。

A 版本

(a) 所蔵者 国立国会図書館

体裁 袋綴(五つ穴) 一冊

寸法 縦二十七・九糎 横十八・九糎

表紙 1山吹色無地

2乳白色無地

帝図図書館蔵の空押し

丁付 軍ノ一：軍ノ十九・軍ノ廿・軍ノ廿一：

軍ノ廿九終

丁数 二十九丁(内一丁跋)

行数 半丁九行

字数 一行十五〜二十字

外題 1 佛鬼軍 全

2 佛鬼軍一休自画自作全

内題 佛鬼軍(扉)

尾題 なし

匡郭 四周双辺

挿絵 一ウゝ四ウ、七ウゝ八ウ、十一ウゝ十二ウ、

十五ウゝ十七ウ、二十六オゝ二十八オ

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名あり

刊記 元禄十丁^一曆上春吉日

洛陽書肆^{五カ} 栗山宇兵衛開版

藏書印 阿波国文庫印(扉、二十九丁オ)

不忍文庫印(二丁オ)

その他 二十八丁ウゝ二十九丁オに跋

世の中にうらなき物語のありふしはふみし
らぬ和歌のうら葉のくらき道までもたかひ
に忍ひあへすうち出ぬることの葉のしけき
中に雫陽十念寺の寶物とかや其かみ名にお
ふ紫野の一休和尚大徳寺一休和尚ハ俗姓ハ仁
王ノ百一代ノ帝後小松院第二ノ王子也の自畫自賛
の佛鬼軍世にもてはやすことなく閑窓に
うすもれて世々を経るに見るものなしこ、

(b)

所藏者 お茶の水図書館成實堂文庫
体裁 袋綴じ(四つ穴) 一冊
寸法 縦二十五・八糎 横十七・九糎
表紙 薄茶流雲模様
丁付 軍ノ一：軍ノ十九・軍ノ廿・軍ノ廿一：

に十八世の何かし巻をひらくに経文まな
こにさへぎり表示^{ひやうじしたなごころ}掌^{せん}にあり禅心をうつ
して見るに其詞^{ことば}たへなる事心詞にいたり
てはいふにさらなり靈奇と云つへし今^い梓^{あづき}
にちりはめむとて正本をもつて一字一畫の
たがひなく淨はりの鏡^{かぐみ}にうつし俱生神
の筆にまかさす後世のたからとなさむため
にかたしけなくありかたき事をもおそろし
きをも拙^{つた}き心にて梓にちりはめふつしか
にしるし侍る事を身なからもおかしくあさ
ましくは思ひなからかゝることありと成共
き、もならはせはやのこゝろあてはかなさ
かへすゝもおかしくはかりことにや

十念寺十八世

澤了書之

軍ノ廿七

丁数 二十九丁 (内、識語半丁、廣告二丁)

行数 半丁八行

字数 一行十五ノ二十字

外題 佛鬼軍一休自画賛完

(「一休自画賛」は墨書)

内題 佛鬼軍(扉)

尾題 なし

匡郭 四周单边

挿絵 国立国会図書館本に同じ

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名付き

刊記 古畫最可翫者無如所謂畫詞類當時事与物皆

可以徵矣然其模本難輒得余嘗既畫家貯之以

為粉本故畫猶足觀其髣髴若其記文不啻失原

本之真或誤写過半或至缺不録偶有善本而得

之者亦模写不堪其繁是以轉播不廣而已京師

十念寺所藏佛鬼合戰狀轉稱書畫並一休和尚

真跡也惜哉今展轉不知落誰手書肆英遵幸得

一古家秘藏模本筆法有度因刻之庶乎不失其

真矣
文政六年癸未八月

筠庭節信識

藏書印 徳富蘇峰文庫印(扉)

その他 表紙見返しに「一休和尚自画賛ノ仏鬼軍ノ

万及堂英平吉蔵梓」の扉紙を使用

所藏者 京都大学附属図書館

体裁 袋綴じ(四つ穴) 一冊

寸法 縦二十六・三釐 横十八・二釐

表紙 薄茶流雲模様

丁付 軍ノ一：軍ノ十九・軍ノ廿・軍ノ廿一：

軍ノ廿七

丁数 二十八丁 (内、識語半丁)

行数 半丁八行

字数 一行十五ノ二十字

外題 佛鬼軍 完

内題 佛鬼軍(扉)

尾題 なし

匡郭 四周单边

挿絵 国立国会図書館本に同じ

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名付き

刊記 お茶の水図書館成篋堂文庫本に同じ

その他 大惣旧蔵本

(d)

所蔵者 京都大学附属図書館谷村文庫

体裁 仮袋綴じ 一冊

寸法 竪十八・七糎 横十二・七糎

表紙 なし

丁付 序・一…十・十一…二十・

二十一…二十七

丁数 二十七丁

行数 半丁八行(序は半丁六行)

字数 一行十四〜十九字

外題 なし

内題 一休佛鬼軍 全
和尚佛鬼軍

尾題 一休和尚佛鬼軍終

匡郭 四周单边

挿絵 菱川清春による③

一ウ〜二オ、三ウ〜四オ、五ウ〜六ウ、七

ウ〜八オ、十ウ〜十一オ、十四ウ〜十五オ、

十六ウ〜十七オ、二十四ウ〜二十六オ

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名つき

刊記 元禄十丁 丑年刻

天保五^甲年再板

寺町三条下ル町

著屋 宗 八

六角通寺町西へ入町

小川多左衛門

洛陽書肆

その他

国立国会図書館本と同文の澤了の跋文を有す

以下の序あり

夫佛鬼軍は戯にして実をあらはし苦をぬき
楽をあたふるの大道なり罪業の陣は破や
すく功德の陣は破がたく水はす、しく火
はあつく地獄はくるしく極楽はたのしき三
才の孩児もよく是をしる八十の翁何ゆへ
に是をしらざるこゝに一休禪師功德の陣に
味方し罪業の陣を破たまふ見る人たれか心
よからざらん諸仁者はやく此味方に加た
まへとす、めるは天保五の春

推翁叟誌

(e)

所蔵者

大谷大学図書館

体裁 袋綴じ(四つ穴) 一冊

寸法 竪十八・五糎 横十二・三糎

表紙 深緑無地

丁付 序・一…十・十一…二十・二十一…二十七

丁数 二十七丁

行数 半丁八行(序は半丁六行)

字数 一行十四〜十九字

外題 一休佛鬼軍 全

内題 一休佛鬼軍 全

尾題 一休和尚佛鬼軍終

匡郭 四周单边

挿絵 京大谷村文庫本と同じ

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名つき

刊記 元禄十丁丑年刻

〔 〕(摩滅)

寺町三条下ル町 著屋 宗 八

六角通寺町西へ入町

小川多左衛門

洛陽書肆

その他 京大谷村文庫本と同じ

B 写本

(f) 所藏者 宮内庁書陵部

体裁 袋綴じ(四つ穴) 合冊

寸法 竪二十三・三糎 横十六・九糎

丁数 十二丁

行数 半丁十一行

字数 一行十七〜二十字

外題 片玉集〔 〕五十

内題 佛鬼軍一卷一休和尚詞書並自画

尾題 なし

本文 漢字平仮名混じり

奥書 唱下分主賓句裏転機輪竹篔篋飯掌握佛魔俱不

親吹毛三尺機動煙塵慣戰作奈七事隨身心方

受敵油断要津呵佛罵祖奪境奪人淫坊酒肆獨

朗天真宗門非異須還宗純誓臨濟正法今墜地

但願祖教再回春 凶佛鬼軍期書之以塞其尾

享德三年六月 一休子宗純

…中略…

右京今出川十念寺宝物寛政十二庚申秋八月

四日

於^(開方)□之艸写之至

…中略…

右十念寺開山真阿上人

後龜山院之孫胤二而一休和尚ト学友なりし

故常ノ法語ノ趣ヲ一休画賛ニ認被贈也

…中略…

右谷中幡随院乘運自省主書写之本浅草行安

寺圓阿上人借許之朽鈍借傳ノ書寫了

享和改元仲夏 涼庵

(g)

所藏者 神宮文庫

体裁 卷子装 一卷

寸法 竪二十七・九糎 横四十・八糎

(本文第一紙)

紙数 二十六紙

行数 一紙二十一行(本文第一紙)

字数 一行二十字程度

外題 佛鬼軍

内題 なし

尾題 なし

本文 漢字平仮名混じり、振り仮名(朱筆)つき

奥書 此卷物者紫野一休和尚自画讀本紙十念寺有

り

享保十四年酉四月中旬写之

藏書印 林崎文庫印

(h)

所藏者 京都大学文学部美学研究室

体裁 卷子装 一卷

寸法 竪二十七・二糎 横四十・四糎

(本文第一紙)

紙数 三十九紙(遊び紙一紙含む)

行数 一紙二十行(本文第一紙)

字数 一行二十字程度

外題 なし

内題 なし

尾題 なし

本文 漢字平仮名混じり

奥書 なし

一・二 諸本の整理

一・一に示した諸本について、その流れを見ておく。

(a) 国立国会図書館本(以下、国会本と称す)は、『仏鬼

軍」版本の中では、最も古い元禄十年版である。

本文の文字は、跋にある「今梓にちりはめむとて正本をもつて一字一畫のたがひなく浄はりの鏡にうつし：」の通り、十念寺本の絵巻の文字に忠実であり、書体まで似せている。

国会本四丁オの「或は馬は龍」の「馬」と「は」の間にある「或」字の補入、また、十四丁オの「家の子の一万文殊劍」の「万」の横にある「字也」の傍注は、十念寺本の絵巻にも見られる。

このように国会本は十念寺本に忠実である。ただし、行振りは同一という訳ではない。

挿絵も、十念寺本の絵を抄出したような形になっている。しかしながら、絵の入れられている位置が、特に後半部でずれている。国会本の十五丁ウ以降に入れられている絵は、十念寺本では、本文末尾の偈文の後にまとめられている。これは、国会本が絵と本文のバランスを考えたためかも知れない。

また、十念寺本には描かれていない仏像の絵によって、国会本の後半の挿絵が増やされ、その絵に比較的近い本文に、その仏菩薩の名が見られる場合がある。

例えば、国会本十七丁オに描かれている南方宝生如来は、

十念寺本にはなく、十八丁オから始まる本文に「南方をばほうしやうと云佛大将の宣うけて寄給へり」とある。また、国会本二十一丁ウに、十念寺本には見られない六観音と日光菩薩・月光菩薩の絵が描かれており、六観音は十九丁オに「六観音大将にて」、日光菩薩・月光菩薩はいずれも二十丁オに「東の手には日光菩薩月光菩薩小將軍にて」と、その名が表れる。その他、大日如来の出陣と結末を述べた本文の後に描かれている大日如来の絵(二十六丁オ)も十念寺本には見当たらない。

このように、国会本からは、十念寺本の趣を残しながら、版本としての体裁を整えた様子を見ることができ。

(b)お茶の水図書館成篋堂文庫本(以下、お茶の水図書館本と称す)と(c)京都大学附属図書館本(以下、京大本と称す)は、ともに文政六年版と判断できる。

お茶の水図書館本は、『國書総目録』には刊年不明とされているが、京大本と同じく筠庭節信(喜多村信節)の識語を有する版である。表紙・題箋ともに京大本と酷似しており、いずれも原装と判断してよいと思われる。

本文・挿絵は、元禄十年版に酷似しているが、匡郭が元禄十年版と異なり四周単辺である。『室町時代物語大成』の解説に覆刻版とある通りである。^④

(d) 京都大学附属図書館谷村文庫本（以下、谷村文庫本と称す）と(e) 大谷大学図書館本（以下、谷大本と称す）は、ともに天保五年版と判断できる。

谷大本は、刊記の天保五年の再板を示す部分が摩滅し、初版の元禄十年を示す刊記が残っている。『國書総目録』には元禄十年版とされているが、明らかに天保五年に刊行された後印本である。

天保五年版は、元禄十年版の本文と仮名字母・振り仮名までほぼ正確に一致させているが、書体は異なっている。元禄十年版に見られた「或」の補入は、本文に組み入れられ、「一万文殊劍」の「万」の傍書「字也」は、傍書のままであるが、「字ん」と読め、意味不明である。

挿絵は、菱川清春という絵師^③によって描かれている。絵の入っている位置も、元禄十年版とはかなり異なっている。

抑も、十念寺本は前半が欠けている。元禄十年版では十念寺本と同じく、地獄の有様を描いた絵の後に、極楽での戦揃えの本文が始まる（従来この絵と本文から前半部分が推測されている^⑤）。だが、天保五年版では内題と本文の後にこれらの絵が入る。従って、極楽での戦揃えの場面の合間に、地獄の有様を描いた絵が割り込む形となり、十一丁までは半丁〜二丁おきに絵が入っている。なお、版本で内

題を有するのも、その外題・内題・尾題のすべてに一休和尚の名を刻むのも、天保五年版のみである^⑥。

このように、天保五年版は、元禄十年版と同じく十念寺十八世澤の跋を踏襲しながら、十念寺本とはかけ離れた本となっている。

次に写本の流れを見ていく。(f) 宮内庁書陵部本（以下、書陵部本と称す）は、奥書の一部に原本が十念寺の宝物である旨が記されており、直接ではないにしても十念寺本からの写しと見られる。絵の部分は、「画 初地獄の有様を図す」というように詞で説明されており、画の説明の差し挟まれている位置とその説明が、十念寺本と合致する。

書陵部本の特筆すべき点は、巻尾の画の説明の後に、一休像の説明がなされ、一休の自跋が記されている点である。十念寺本の原物は未見であり、実際に十念寺本がこのような跋を有するかどうか定かでないが、写真で見える限りでは確認できない^①。

(g) 神宮文庫本は、版本や他の写本がかなり十念寺本に忠実であるのに比べ、使用されている平仮名字母の違いを始め、表記の違いや誤脱が目立つ本である。

絵は肉筆で描かれているが、その入る位置は、十念寺本よりは元禄十年版の版本に近く、構図も版本と一致してい

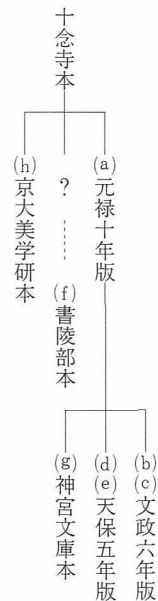
るところがある。

元禄十年版と絵の順序を比較してみると、版本の三丁オ・ウの絵と四丁オ・ウの絵との順序が入れ替わっていたり、二十一丁ウの絵が、神宮文庫本では本文末尾の偈文の後に入れられたりという違いがある。

しかしながら、その二十一丁ウの絵というのは、十念寺本には認められない六観音と日光菩薩・月光菩薩の絵である。この他、本文の方でも、十念寺本・書陵部本の写本では改行されていない「東の手には日光菩薩月光菩薩小將軍にて」で始まる段落（元禄十年版二十丁オ）が、神宮文庫本では版本同様に改行されている。これらの点からも、神宮文庫本は版本からの写し、それも奥書の享保十四年を信じれば、元禄十年版の写しと考えるのが妥当であろう。

(h)京都大学文学部美学研究室本（以下、京大美学研本と称す）は、書写年は不明であるが、管見の写本の中では、最も時代が降るであろう。^⑦十念寺本と突き合わせると、数ヶ所の欠字が見られるが、本文・挿絵ともに忠実に写された十念寺本の模本である。

以上、(a)～(h)の諸本の流れを図示すると次のようになる。



二

次に、『仏鬼軍』に用いられている振りの素材について述べてみたい。

この作品には、振りの素材として図像が用いられていることを指摘することができる。以下に、阿弥陀二十五菩薩来迎図、文殊渡海図、両界曼陀羅の三つを取り上げて、順に見ていくことにする。

二・一 阿弥陀二十五菩薩来迎図

阿弥陀二十五菩薩来迎図（以下、「二十五菩薩来迎図」と称す）―特に、知恩院本、聖衆来迎寺本等の著名なもの―は、鎌倉中期を降る頃の作品であり、その時代の頃から来迎図の二十五菩薩の持ち物は、伝恵心僧都作の二十五菩薩和讃に説くものと同じと見てよい、といわれている。^⑧

では、『二十五菩薩和讃』の中で、二十五菩薩はどのように説かれているか。

觀音菩薩の蓮台は	我等衆生を乗給ふ
勢至菩薩の合掌は	定慧不二の表示なり
普賢菩薩の幡蓋は	恒順衆生と指掛る
藥王菩薩の幢幡は	不老不死と翻がへす
藥上菩薩の玉幡は	住行向地の階位あり
法自在王の華鬘は	撰取不捨の功德あり
獅子吼菩薩の乱拍子	下化衆生と踏たまふ
陀羅尼菩薩の舞の袖	上求菩提をすゝむなり
虚空蔵の腰鼓	能滿福智のおと高し
徳蔵菩薩の笙の音	十八不共のひゞきあり
宝蔵菩薩の笛の聲	三解脱門の風すゞし
金蔵菩薩の箏の琴	三十七尊顕現す
金剛蔵のことの絃	十界一如とひゞくなり
光明王の琵琶の撥	無明のまよひを驚かす
山海慧の箏篋の緒	寂靜真如の理を示す
華嚴王の銚のおと	唯心法界澄わたる
衆宝王の擊鏡は	一仏乗を讃嘆す
月光王のふりつゞみ	十方世界を響かせり
日照王の羯鼓は	四土寂光とうち鳴す
三昧王の天華は	虚空海会に散乱す
定自在王の太鼓は	平等大会のひゞきあり

大自在王の華幢は 畢竟空とさしそびゆ
 白象王の宝幢は 第一義天に翻へす
 大威徳王の曼珠には 無漏説法円なり
 無辺身の焼香は 如来に供養し奉る^⑩

さて、『仏鬼軍』の中で、二十五菩薩來迎図が取り入れられていると考えられるのは、極楽の側の戦揃えの場面である。元禄十年版の本文を以下に引用する（以下、引用中の句読点は私に付す。振り仮名は省略する）。

九品蓮臺の大名高家たれくぞ等覚山の観音左衛門、蓮華野の勢至太郎、横笛の薬王兵衛、笙笛の薬上武者、懺悔の里の普賢殿、琴上手の自在五郎、三賢寺の師子孔十郎、同じ陀羅尼三郎、能滿福智の虚空蔵冠者、歛喜地の徳蔵庄司、同弟に法蔵別当、又、金剛蔵大夫、光明太郎、珠寶平内、指箭の山海恵、大刀の華嚴王、大箭月光王、小箭の日照王、逸り尾の定自在、一番かくる三昧王、ひたやふりの大自在王、一人当千の白象王、打物の大威徳、はやばしりの無辺身、かくのごとくの廿五の菩薩一人して九億万恒河沙の郎等を打供して、乗物はこのみくも也

これを、先掲の『二十五菩薩和讃』と比べてみると、『仏鬼軍』では、金藏菩薩が挙げられておらず、二十四菩薩になっている。それにもかかわらず、「かくのごとくの并五の菩薩」と記されており、飽くまで二十五菩薩のつもりであったことがわかる。

また、虚空藏菩薩が能満福智と対になって表されるのを除いては、『仏鬼軍』の表現と『二十五菩薩和讃』に表れる菩薩の持ち物や下句の表現との間に、合致する表現は見られない。しかしながら、戦揃えの場面に「横笛の葉王兵衛、笙笛の葉上武者、…琴上手の自在五郎」という表現が見られることには注目してよいであろう。その後続く諸菩薩が武器を持ち、その雄々しい性格が述べられているのとは一線を画している。これは、やはり二十五菩薩来迎図を念頭においての表現であるというべきであろう。

そして、ここからは、二十五菩薩には、(どの菩薩かはよく判らないが)笛や笙や箏を持った菩薩がいるという大掴みな把握が窺える。例えば、『二十五菩薩和讃』を傍らにおいて参考にしたとは、到底考えられないのである。

以上、作者側に立って、二十五菩薩来迎図が作品の素材として用いられたらしいことを指摘したが、次に、享受する側が、この場面の絵を「二十五菩薩来迎」と表現した例

があることに触れておく。

書陵部本の『仏鬼軍』写本は、先述の通り、十念寺本の絵巻を書写したとおぼしき一本である。絵巻の絵の部分は絵を説明した文となっており、その該当する箇所を「画 廿五菩薩来迎の並ひ」と説明している。戦に向かう菩薩の絵を、「来迎」と称しているのである。

ところで、このことは、本文もさることながら、絵巻の絵に二十五菩薩来迎図を彷彿とさせる要素があったことを考えさせる。

いわば、本文における振りと、絵における振りとが同時に行なわれているのである。確かに、視覚的な図像を振りとして取り入れるのであれば、やはり視覚的な絵に取り入れるのが手っ取り早いであろう。絵と詞書からなる絵巻という体裁は、図像を振りとして取り入れるのに便利であったと考えられる。

ところで、元禄十年版本は、十念寺本の絵巻をかなり忠実に版本にしたものと見られるが、絵に関しては、絵巻の全部が載せられているわけではない。当該部分の絵は、七丁ウの左側約三分の二に、龍に乗った菩薩、獅子に乗った菩薩、象に載った菩薩が描かれ、龍に乗った菩薩のやや左上に「勢至菩薩」、象に載った菩薩の左横に「観音菩薩」

と書かれている。無論こうした記載は十念寺本には見られない。

二・二 文殊渡海図

文殊渡海図は、獅子に騎乗した文殊が、善財童子、優團王、仏陀波利三蔵、大聖老人の四人の従者を従え、雲に乗る図で、その背景に海が広がるところから海を渡る図とされる。だが、どこの海をどこからどこへ向かうのか等不明である。

文殊と四人の従者は、いわゆる五台文殊の五尊である。文殊渡海図は、『岩波仏教辞典』には、鎌倉時代以降、文殊菩薩の聖地とされる中国五台山信仰にもなつて流行したと記され、『仏教文化辞典』の「五台山文殊と渡海文殊」(関信子氏執筆)には五台山文殊の変化形と記されている。だが、その構想がどこで生まれたかは不明である。さて、『仏鬼軍』で文殊渡海図の振りと考えられるのは以下の箇所である。

復将軍大聖文殊は師子王にたてまつりて、清涼山に門出せさせ給へり、家の子の一万文殊劔を抜、心一にて打手をそろへたり、大聖老人、佛陀頗梨三蔵おもひき

りてみえたりける、優團大王は、はたさしとかや

(十四丁オ)

ここでは、善財童子の名が見られないが、概ね文殊渡海図の構図になっている。不完全な表現のしかたであることは、先の二十五菩薩来迎図と同様である。

ところで、上述の引用だけでは、この構図が文殊渡海図の振りであるか、五台山文殊の振りであるかの判断はつけ難い。ところが、この本文に該当する絵が、十念寺本の絵巻、元禄十年版の版本ともに、足元に雲を敷いており、絵としては文殊渡海図により近い。

十念寺本では、獅子に乗った菩薩が、僧形の者(佛陀頗梨三蔵)、中国風の衣服を纏った者(大聖老人)、異国風の衣服を纏った者(優團大王)を従えた図が描かれており、本文に忠実である。元禄十年版では、これらの従者の内の異国風の衣服を纏った者(優團大王)のみが描かれ、その絵の左横に、「文殊菩薩」と記されている。

これが、単に版本であるが故の絵の限界であったのか、文殊渡海図とは見ていなかったということなのか、菩薩の軍勢の中に異国風の衣服を纏った者が混じっていれば文殊渡海図であることがわかるといふことなのか、いくつかの

理由を推測してみる事はできる。ただ、版本には、十念寺本には描かれていない絵が、本文に合わせて補われている場合があることを考慮しても、この絵を文殊渡海図そのものと見ていたかどうかは不明としなくてはならない。ともかくも、十念寺本においては、ここでも本文の振りと絵の振りが同時になされていることが確認できる。

二・三 両界曼陀羅

両界曼陀羅は、金剛界曼陀羅と胎藏界曼陀羅とからなる。「仏鬼軍」では、主に胎藏界が振りとして用いられているが、以下の本文中には金剛界と胎藏界の名が表れる。

大日心王此由きこしめして、蜜嚴國土より大勢をそつかわしける、金剛界といふ里より十三九會の七百余尊、胎藏界と云都より三部四重の五百余尊ぞ打出で給へる

(二十二丁オ)

金剛界曼陀羅は、全体を九区分していることから九会曼陀羅ともいわれる。上部中央に大日如来が描かれ、他の八区画に千四百六十尊が描かれる。^⑭胎藏界曼陀羅は、中台八葉院を中心に十二院(十三院という説もある)^⑮が描かれ、

仏部、金剛部、蓮華部の三部を有している。全体で四百四十四の仏像が描かれる。^⑭

「金剛界といふ里より十三九會の七百余尊」の「十三」は、胎藏界曼陀羅の十三院が紛れたものではないかと思われるが、それにしても不自然な感は否めない。

「胎藏界と云都より三部四重の五百余尊」の「四重」は、例えば、吉祥真雄氏が「曼荼羅圖説」において示された「大日經具縁品の曼荼羅」のように、中台八葉院を中心とした四重の枠をもつ形をいうのであろう。

また、数にこだわれば、金剛界・胎藏界ともに仏像の数が、通常言われる尊数と全く相違している。

だが、このことは、必ずしも「仏鬼軍」がでたらめな数字を掲げた事を示している訳ではない。「太平記」卷三十九「光嚴院禪定法皇行脚事」に、次のような条が見られる。

サテ御山ニモ御著有シカバ、大塔ノ扉ヲ開セテ両界ノ曼荼羅ヲ御拝見アレバ、胎藏界七百餘尊、金剛界五百餘尊ヲバ、入道太政大臣清盛公、手ヲ書タル尊容也

「仏鬼軍」では、金剛界が七百余尊、胎藏界が五百余尊となっており、「太平記」の例とは数字が入れ替わった形

になっているが、いわゆる正確な数字とは別に、このよう
な言い回しがあったことを窺わせる。¹⁸⁾

さて、『仏鬼軍』では、大日如来の軍勢が地獄を攻め勝
利を収める。その後、地獄は次のように処置される。

阿防羅刹をは、こしらへすかしてこゝろをあらためて
佛になし給へり、冥官冥衆のすかたをかへすして曼陀
羅の聖衆に引上せて、等流法身と地獄に浄土をうつし
て、地に引字をしきてかたちを八葉蓮花に作たり、中
台には大日心王の都を立たり、東方をは薬師領し給へ
り、南方おは寶生領し給、西方を阿弥陀申請給、北方
おは尺迦主つき給、四角をは普賢、文殊、観音、弥勒、
知行し給へり、是も則一往の會尺也、諸尊皆同大毗盧
遮那佛身と尺して、大日心王の都也

(二十三丁オーウ)

「東方―薬師」「西方―阿弥陀」の対は、薬師如来の浄
土を東方浄瑠璃世界と呼び、阿弥陀如来の浄土を西方極楽
浄土と呼ぶのに拠るのであろう。「南方―宝生」の対は、
金剛界曼陀羅の南方月輪の中尊が宝生如来であるところか
ら来ているかとも考えられ、そうであるとすると、胎藏界

曼陀羅と金剛界曼陀羅を混同していることになる。

四角の菩薩は、中台八葉院の四角の菩薩とほぼ一致する
(「観音」は、観自在菩薩とされる点が相違する)。

この条では、浄土をそっくり移した地獄の様子が、曼陀
羅を扱った、大日如来を中心とする世界として描かれてい
る。

この部分に相当する絵は、十念寺本には見当たらない。版
本でも、蓮台に座した大日如来が雲に乗っている絵が描か
れているのみで、曼陀羅を連想させる画面にはなっていな
い。この点、先の二十五菩薩来迎図や文殊渡海図とは異な
っている。

三 まとめ

以上、『仏鬼軍』中の振りの素材に、図像が用いられて
いることを指摘してきた。

ところで、仏菩薩がそれとふさわしく登場するために、
既成の図像が手本とされるのは、振りかどくかは別に、
確かにありそうな事である。

それでは、作者には振りの意識は全くなかったのである
うか。

世間の浅名をもて、法性のふかき所をあらわす此合戦
状は、佛智にかなへり、更にそしる事なかれ

(二十五丁ウ)

「世間の浅名」は、「法性のふかき所」に対応するのであるから、卑俗な表現と言った意味であろう。また、「更にそしる事なかれ」という表現は、この「世間の浅名をもて」書かれた「仏鬼軍」が、「佛智にかな」っているようには一見受け取られず、誇りの対象となる恐れがあることを示している。要するに、作者自身、仏教に対する誹謗と取られかねない作品であることを承知していたのであろう。

さて、「仏鬼軍」では、振りの素材として仏教図像が用いられていることが確認できるものの、当時どのような図像が一般的であったかが判然とせず、現在一般的な図像と比べれば、「仏鬼軍」に見られる図像はかなり変形されているように見える。それでも、振りの素材という取り込み方から仏教図像の享受の一面を窺うことができる。また、その振りの表現に、絵巻という形式が重要な役割を果たしたと考えられることは、既に見てきた通りである。

註

① 本稿では、十念寺本を『御伽草子絵巻』（奥平英雄編、角川書店、昭五十七）の影印によった。なお、『室町時代物語大成』十一に、異本と思われる本が紹介されているが未見である。

② 『國書総目録』記載の諸本の内、未見の諸本に、十念寺本の他、写本では東京国立博物館本（「仏鬼軍絵巻」模写、一卷）、森川勘一郎氏蔵本（「伝仏鬼軍絵巻断簡」、一幅、重要美術品）がある。版本は所蔵が多数あるので、『國書総目録』に記載されている刊年それぞれの中から一、二本を選んで調査した。後述のように、刊年不明本と記載されているお茶の水図書館成實堂文庫本が、文政六年版であることが判明したため、刊年不明本（他に、香雨文庫にあるとされる）は未見である。

③ 伝記未詳であるが、天保七年刊の『一休諸国物語図会』の絵師である。

④ 『室町時代物語大成』十一、五百四十五頁。

⑤ 『日本古典文学大辞典』第五卷「仏鬼軍」の項（藤井隆氏執筆）。

⑥ 註③参照。

⑦ 京都大学の受入印の日付は、大正五年九月十五日。

⑧ 「仏鬼軍」が戯作的であることは、後藤丹治氏が『中世国文学研究』（磯部甲陽堂、昭十八）の中で擬人小説の分類と捉えられた他、白畑よし氏「『仏鬼軍絵巻』に就いて」（大

- 和文化研究』九卷四号、昭三十九)等に指摘されている。また、牧野和夫氏「無明法性のこと―覚書―」『無明法性合戦状』の背景―(『東横学園女子短期大学創立二十五周年記念論文集』、昭五十六)にも触れるところがある。
- ⑨ 『日本の美術』四十三号「阿弥陀来迎図」(昭四十四)。
- ⑩ 引用は『恵心僧都全集』第一巻による。
- ⑪ 従者には諸説ある。金子啓明氏「文殊五尊図像の成立と中尊寺経藏文殊五尊像(序説)」(『東京国立博物館紀要』第十八号、昭五十八)に詳しい。
- ⑫ 佼成出版社、平一。
- ⑬ 大串純夫氏「渡海文殊像について」(『美術研究』第三百三十一号、昭十八)に中国において優團王のみを従者とする像のあることが記されている。
- ⑭ 岩本裕『日本仏教語辞典』(平凡社、昭六十三)などでは、金剛界曼陀羅千四百六十体、胎藏界曼陀羅四百四十四尊とされるが、例えば、真別処本「金剛界大曼陀羅図」では千四百七十八体、同「胎藏界大曼陀羅図」では四百十四尊(ともに「大正新修大藏経」図像部一所収)となっており、必ずしも数は一定していない。
- ⑮ 真別処本「胎藏界大曼陀羅」では院数が十三となっている。また、『織田仏教語辞典』によると、大日経四部義軌の青龍軌に十三大院の説が見られるとのことである。
- ⑯ 山城屋文政堂発行、昭十、十五頁。
- ⑰ 引用は『岩波日本古典文学大系』による。

⑱ 註⑭参照。

付記

本稿をなすに当たり、宮内庁書陵部、お茶の水図書館、

国立国会図書館、神宮文庫、京都大学附属図書館には貴重な

図書を閲覧させていただきました。記して深謝申し上げます。

(本学助手 国語学国文学)